書　評

立教大学観光学部紀要　第19号　2017年3月
Rikkyo University Bulletin of Studies in Tourism No.19 March 2017
pp. 97-98.

"Introduction to Hospitality and Tourism ― A CLIL Approach"

By Kyoko Morikoshi and Kayoko Yoshida
MarketAsia Books Pte Ltd., 88pp, 2016

森越京子・吉田かよ子『CLIL アプローチによるホスピタリティ観光学入門』

藤　田　玲　子*
FUJITA, Reiko

本書は英語で書かれたツーリズムの初修者用のテキストである．加速するグローバル化の中で，ツーリズムの国際化も顕著になり，国際共通語としての位置を占める英語の役割は，観光場面においても観光研究においても，ますます重要となっている．将来観光業に従事したり，観光研究で活躍したりする観光学専攻の大学生にとって，英語で観光学を学ぶことは非常に有意義なことである．このテキストは「英語で学ぶ」という大きなハードルに対して，教える側にも学ぶ側にも取り組みやすい工夫を取り入れているという点で，広く使用が可能なものとなっている．

実際，平均的な日本人大学生が英語を使用して専門分野を学ぶことは容易ではない．日本人大学生の TOEIC IP（団体受験）テストの平均は例年440 点程度であり（TOEIC Data Analysis 2015, 2016），TOEIC テストの実施法人である国際ビジネスコミュニケーションが発表している TOEIC の点数に応じた「できることリスト」によれば，これは「自分の専門に関する文書を読んで理解」することが「何とかかろうじてできる」一番下のレベルである．「ほぼ問題なくできる」ためには700 点以上が必要となっている．英語を媒体として教える場合，教員からすれば，このようなレベルの学生達に対し，どのような教材を使用すればいいのかが課題であった．ホテル英語やエアライン英語など会話系を扱う英語テキストは存在しても，アカデミックな観光の内容を扱う英語で書かれたテキストは国内では皆無といってもよい．米国や英国の高等教育機関で使用されているようなテキストを使用せざるを得ないと考えても，それらは内容が詳細で英語のレベルも高く，上述のような日本人学生にはとても歯が立たない．このように，教員が英語で日本人学生にツーリズムやホスピタリティーを教授したいと考えても，適切な教材をなかなか見つけることができないのが現状であった．

ここで紹介する Introduction to Hospitality and Tourism は，そのような教員にぜひ手に取ってもらい，担当のコースで使用を勧めたい教材である．英語が母語でない学生の英語レベルを考慮して平易に書かれており，学生は臆することなく英語で専門の内容の基礎を学べるテキストとなっている．"CLIL Approach" を表題に掲げているが，CLIL（Content and Language Integrated Learning ＝内容言語統合型学習）とは，言語教育の中で，近年日本でも取り入れられることが多くなった CBI（Contents based Instruction ＝内容重視教育）を目指したアプローチである．CLIL が目指すのは言語（Communication）と内容（Contents）の習得のみならず，学習者が協働し（Community）思考や認知する力（Cognition）

＊立教大学観光学部・兼任講師／東海大学国際教育センター・教授

を高めていくことである．本書にはこの考えをベースとした，ディスカッション活動やリサーチ活動などのエクササイズが各章に含まれており，学習者は専門分野の内容を学ぶと同時に英語も身に付け，さらに協働する姿勢や思考力など様々な力を養っていけるような設計となっている．

本書のパート１では，５つの章を割いて，今日の世界の観光産業や関連トピックについて解説がなされている．ワールドツーリズム，観光教育とリーダシップ，デスティネーション・デザイン，タイのツーリズムなどが扱われているが，これは，アジア太平洋地域の観光ホスピタリティー教育を牽引する３人の主導者の講演内容をわかりやすい英語で編集したものである．アジアの視点からまとめられた内容は，欧米系のテキストにはない要素を含み，観光産業の中心がアジアへとシフトしている今日において斬新で，アジアに住む自分たちにとっても意義深い内容であるといえる．

パート２は，観光ホスピタリティー学や産業における様々なトピックを取り上げた内容となっている．７章から成り，ホスピタリティー産業の概要やそのグローバル化と観光産業，エアラインや旅行業についても具体的に触れられている．また，さらに踏み込んで，人材開発，エコツーリズムや文化人類学に関しての章も設けられている．欧米のテキストであれば何ページもかけて詳細に説明がありそうな事項を，非常に簡潔に定義を示すような形でまとめてあるので，学生にとっては，英語で専門を学ぶための入口となるだろう．観光に関わる専門語彙や概念は太文字でハイライトされているので，その意味を確認しながら，学ぶことができる．簡潔にまとめられた内容を英語で学んだあとは，学生自身がCLILのアプローチのエクササイズでさらに踏み込んで調べ，その結果を他の学生と話し合ったり，発表したりして，内容を深めることも可能である．

観光学と英語をつなぐ適切な教材がない現状の中，本書は特に日本人学生にとっては，英語力を伸ばしながら，専門を学ぶ機会を与えられる希少なテキストであるということができるだろう．アジアの国々の大学では，英語を媒体として教育を行っているところも多く，ツーリズムの国際会議においては，アジアの大学生や大学院生が流暢な英語で研究発表をしているのを見かける．それに比べてアジア諸国の中でも日本人の英語力は低く，研究を英語で発信していくこともあまりできていないのが現状である．日本の観光系の学部や学科において，カリキュラムの中に英語を媒体として教授するコースを増やし，英語を伸ばしながら専門知識の習得をめざし，国際的に活躍できる人材を輩出するよう，取り組んでいきたいものである．その目的達成に本書は必ずや役立つに違いない．

■